

あとがき

前田 禎彦

隠岐島（島根県）は、島根半島の北東約 40～80 km の日本海上に浮かぶ 4 つの島と約 180 の小島からなり、南西の西ノ島・中ノ島・知夫里島を道前、北東の大島を道後といっています。玄界灘の沖ノ島と同様、出雲のはるか沖合にあるため、「オキ」と呼ばれたのだと考えられています。

かつて、この島々は隠岐国と呼ばれ、道前に知夫郡・海部郡、道後に周吉郡・穩知郡の 4 郡が置かれていました。歴史上は後鳥羽上皇・後醍醐天皇をはじめ多くの人びとが配流された流人の島として知られていますが、海や山の恵みの中で島の人びとは多様な生業・生活を営んできました。古代では隠岐国の貢進物は、志摩国（三重県）と同様、魚類・貝類・海藻などの海産物ばかりでしたし、近世には長崎から中国に輸出される俵物の串鮑・串海鼠の産地に指定されていました。また、杉・松・樅などの良材を産出し、特に杉は隠岐杉の名で知られていました。山がちな地形や玄武岩質の土壌のため水田に恵まれませんが、牛馬の放牧が盛んで、牧畑と呼ばれる特殊な輪転耕牧法により、麦・大豆・小豆・粟・稗など雑穀類が作付けされていました。

こうした魅力と謎に満ちた島に渋沢敬三がアチック同人とともに訪れたのは、昭和 9 年（1934）5 月、渋沢 38 歳の時のことでした。ごく短期間の旅行でありましたが、その軌跡とその成果・影響を、できる限り詳細に追究したのが、本報告書「アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究—「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察」です。リーダーの小林光一郎（神奈川大学日本常民文化研究所）はじめ、檜村賢二（鳥取県公文書館）・木村裕樹（天理大学）・永井美穂（渋沢史料館）・羽毛田智幸（横浜市歴史博物館）らが分担しながら各関係機関に分散している資料の調査に当たり、調査メモにまでさかのぼって、隠岐調査がどのような目的で、どのような方法で、どのような成果をもたらしたのかを明らかにしています。その結果、表面的な年譜などからは推し量られない調査の生き生きとした実態がよみがえってきています。

渋沢敬三とアチック同人が行ってきた各地への旅行が日本の民俗学のその後を刻印することになったか、それは、こうした地道で着実な調査を通じて明らかにされる必要があるのでしょうか。読者の皆さんには、2 年間にわたる研究グループの熱意と努力の成果を存分に感じ取っていただきたいと思います。